法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

本田先生の人と業績

KITAGAWA, Takayoshi / キタガワ, タカヨシ / 北川, 隆吉

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
社會勞働研究 / Society and labour
(巻 / Volume)
13
(号 / Number)
4
(開始ページ / Start Page)
151
(終了ページ / End Page)
158
(発行年 / Year)
1967-03-20
(URL)
https://doi.org/10.15002/00017763

本田先生の人と業績

北川隆吉

時間の制約がありますので、簡単に〝本田先生の人と業績〟に触れさせていただきたいと思います。

本田先生の「略年譜」がお手もとにわたっていると存じますので、それなども参考にしていただければと思います。

本田先生の人と業績についてのべますまえに、七年間にわたりまして、この法政大学で教鞭をとっていただき、十年前にはまだ影も形もありませんでした法政大学の社会学部社会学科を創設していきます上で、あるいは又、大学院の社会学専攻課程をもうけます上で、大変なお力になっていただきました本田先生に、社会学科の教員の一人として、またここに参集した学生諸君に代わりまして、心からお礼を申し上げます。

さて、「略年譜」にもありますように、本田先生は一八九六年（明治二九年）に兵庫県でお生まれになっています。私共が今、生きている時期、一九六七年という年は、明治から百年、ロシア革命が起きてから五〇年、日中戦争が始まりまして三〇年、そしてまた、新憲法が施行されまして二〇年という年にあたります。私などは戦争からしか知りませんし、学生諸君はおそらく新憲法発布の頃に生まれたのではないかと思うのですが、本田先生はそのほとんどを御存知になっている。明治維新は不幸にして御覧になってないようですが（笑）、どちらかといえば、ずっと明治維新に非常に近い（笑）わけです。これまでの日本の近代史の半分以上にわたる長い期間を生きてこられたし、その歴史の激動を自ら体験し、その中を生きてこられたということです。本田先生の一生には、明治、大正、昭和の近代史が刻まれているといってよいのです。

本田先生の経歴といいますか、一生を考えていきます上で、兵庫県立第一神戸中学校の頃にお知り合いになられた、正確には教えを乞われた如是閑、長谷川万次郎の存在は、どうしても

消せないような気がします。現在もなお如是閑老をたづねておられますし、六十年にわたる交渉がお二人の間でたえることなくつづいているのですが、おそらく長谷川如是閑との出会いが、この時期に本田先生になかったら、本田先生はあるいはもっと違った道を歩かれたのではないかという感じもするわけであります。ここで、おそらく本田先生は、如是閑をとおして近代的な思考、ものの見方を学ばれたのではないかと思います。

その後、第三高等学校（旧制、現在の京都大学教養部）を卒業されて、大正七年（一九一八年）に東京帝国大学文学部文学科（フランス文学専攻）にお入りになりました。このフランス文学科にお入りになったのは、社会学を学ぶための予定の行動で、語学をたくさん知っておかなければならないということでお入りになったようです。そして翌年（一九一九年）に哲学科（社会学専攻）に転科をされて、社会学の研究にお入りになります。この頃に略年譜にもありますようにさまざまな社会運動家、あるいはまた、当時の論壇をになっていた数々の方々と交渉ができたようであります。たとえば堺利彦にF・エンゲルスのものをよんだかときかれて、その頃はまだよんでいなかったため恥しい思いをされたと話をしておられます。卒業後研究生活にお入りになったわけでありますが、二・三年文部省や司法省関係の嘱託などをしておられ、翻訳などもされておられます。また当時、法政大学の予科の講師もされていました。ですから、法政大学には二度のお勤めということになるわけであります。この頃の法政大学は豊島与志雄さんであるとか、森田草平さんとか漱石門下の方々がたくさんおられたわけで、法政大学八十年史にも書かれているように、かなり自由なのびのびとした大学であり、その一翼に先生もあったわけです。今と同じと云いたいところなのですけれども――（笑）。非常に新しい気風にもえていた時期であったようです。

それから、一九二四年に大阪高等学校（今の大阪大学）の教授になられまして、フランス語と心理学を教えられました。ここで研究をつづけられたわけですけれども、一九三三年に「略年譜」では「反軍国主義的な言動を理由に」というふうになっていますが、私が先生の教え子である中野清見という方におうかがいしたところによりますと、またこの当時大阪高等学校の同僚であり、先生の今度の定年について一文をお寄せいただいている桑原武夫さん（京都大学）のものなどを参考にいたしますと、ある運動部の生徒が、「満洲帝国をどう思うか」といった質問をわざと授業中にいたしまして挑発をした。それに対して本田先生は非常にまじめなものですから、「あれは傀儡政権である。あんなものをつくったのは日本の軍閥の悪い策動である」というようなことをお話になったらしいのです。それで辞任、実はクビ（笑）ということになりました。私はこの言動は、本田先生の節を曲げない毅然とした、真理に忠実な、立派

な行為であったと思うのですが、その頃の雰囲気を知る上でも、本田先生を知る上でも大変興味のあることで注目すべき事件だろうと思います。

なおついでですが、本田先生がおやめになったあと中野清見さんは、先生を「売った」（彼はそういう云い方をしていましたが）学生を大阪のどこかの駅で投げとばしてやったのだと云っていました。先生の恨みをそういうふうに晴らしてくれる（笑）学生が片方にはいたわけでありまして、これも面白いことだと思うのです。

それから先生は、いわば浪人生活にお入りになるわけです。世が先生を受け入れなかったということになります。

昭和一五年には、学校を辞めさせられただけではなくて、当局の言論圧迫の結果、検挙をされるということになります。これは唯研などの活動が問題だったのだろうと思います。先生のお話では、ナチスの軍隊がパリに入城したという報道を獄中で聞いたときは「恐かった」とおっしゃっておられます。同時に、それ故にでしょうけれども、パリが解放されたというニュースを、本当に心からうれしく聞いたと云っておられます。こうしたことについては、同じ世代の古在由重先生なども、同じようなことを書いておられますけれども、私どもには解からない苦難の、暗黒の谷間を経てこられたという点で、きびしい中を生きてこられた先生の姿を、私達はいまの状況とてらしあわせて、もう一度考えてみる必要があるだろうと思っています。

戦後になりまして、立教大学の講師などを経られて、一九四九年から名古屋大学の教授として赴任され、社会学科の主任として活躍されました。一九五三年に名古屋大学文学部長になられ、また日本学術会議の会員になられます。あるいは、日本社会学会の理事などを経られるわけです。これは申し上げてよいことかどうかわかりませんが、名古屋大学文学部長時代には、名古屋大学の学長に候補として推せられたとうかがっております。また先生は、そのほかにもいく度か学長になられるチャンスがおありになったようであります。しかしついに一度もおなりになりませんでしたけれども、いろいろな点で、どの大学の学長にもおなりにならなかったというところに本田先生らしいところがある、というふうに私は思っています。

一九六〇年（昭和三五年）から法政大学の教授としてお教えいただいて、今日に至るということになります。

なお、ここで終るわけではありませんで、この四月からなおひきつづいて和光大学で先生は教鞭をおとりになり、研究をお続けになることになっています。

以上が非常に簡単な先生の略歴であります。今、申しましたことを前提にしながらお聴きいただきたいのですが、その間に先生の学問的なお仕事は非常にたくさんあります。それを一つ一つあげてゆきますと大変ですので、やや整理して先生の業績

について次に申し上げたいと思います。先生のお仕事は、大きくわけて三つないし四つの時期に分けることができるのではないかと考えます。

最初に、てがけられました問題をひろってみますと、卒業論文が『犯罪と刑罰』、そしてその頃お訳しになったものに「トーテムとタブー」などがあります。非常に心理学的なものに近いものを中心に勉強なさった。これが第一の時期の特徴だと思います。そしてこの時期の代表的なものとしてあげておきたいものに、大阪高等学校の教授になられましてすぐお書きになった『心理学概論』という本がございます。社会学者である本田先生が心理学概論というのはおかしいとお考えになるかもしれませんが、実はその後半に、現在の社会心理学にあたる部分が構成されているわけです。先ほど、先生から「足のない幽霊社会心理学」というお話がありましたけれども、社会心理、意識といったものについて、非常に早くに着目されまして、それを『心理学概論』の中に入れておられるわけです。その段階での本田先生のお仕事は社会構造といいますか、あるいは社会体制というものとの関連で社会現象を捉えられていたとは思われないわけですが、そういうものへ移行する前段の時期であり、それの代表が『心理学概論』であったと考えられます。

それから徐々に、先生は社会構造、あるいは階級という問題に注意をむけられ、マルクス主義との接触、マルクス主義を基本に据えるという展開をみせておられます。小野清一郎博士とおやりになった「犯罪」の研究などから、それがうみだされる社会的基礎を追求するということで、徐々にマルクス主義をとり入れていくことをされたようです。その方法に従って社会学の領域の中で非常にはっきりと一定の傾向を打ち出されていったのが、先生の言葉を借りれば、『フォイエルバッハ論』に相当するものであり」そして「自分が書いたアカデミックな仕事としていちばん力を入れたもの、私の博士論文である（先生は「博士号」はおとりになっておられませんが）」といわれている『コント研究――その生涯と学説』であります。一九三五年に出されています。これは戦中、反軍国主義の故をもって学校を追われた浪人生活の中で、二年間これと取り組み、外に出るのは昼に東中野のお宅からそば屋に出る、その散歩の時だけ。その時を除いては資料と取り組んでまとめられたのがこの『コント研究』だということです。「あれを書いた時が一番楽しかった」と述懐されていますが、先生はそうした立派な、自分自身にたいしても納得のいく仕事をなさいました。これは、要するに史的唯物論の立場からコントを批判した非常に克明な仕事であり、地味ではあるが輝きのあるものです。これが第二の時期を特徴づける仕事だと私は思います。その間に、一つには生活の問題もおありになってだろうと思いますが、いろいろな翻訳も出されています。その中には、ルソー『人間不平等起源論』

とか、平岡先生と共訳されたディドロ『ラモーの甥』など非常に面白いものを抜き出して翻訳されています。

そしてまた、この時期、コント研究をされていた時期に触れておかねばならないのは、平野謙の「日本文学史」の中にも出てきますように、先生はこの頃、同人誌の一員として文学にかなりの興味を示されたということです。万葉の研究などもおやりになったようです。それは、日本人の社会意識の原型を知りたかったからだ、と云われていましたが、そういうことで文学の研究、あるいは文化について、日本の現実に即した研究をしておられます。一般的には、本田先生をフランスについての研究家、あるいは、社会思想史の研究者と、考えているむきがあります。もちろんそれが全く見当はずれで、まちがった評価というのではありませんが、本田先生は決してそれだけではなくて、日本の現実についても、以前からかなり深く研究なさっておられたわけです。

戦後になって、先生は社会学の研究に専念することができる条件ができまして、いろいろな研究をなさったわけですが、第三の時期をなす仕事というのは、やはり、培風館から出ました『社会学入門――史的唯物論による基礎づけ』（一九五八年）ではないかと思います。こういう書物が決して無かったわけではありませんけれども、かなり広く、しかも体系的に史的唯物論による基礎づけといった形で社会学についてアプローチをし、一定の結論を出されたという意味でも、非常に重要な著作、日本の社会学全体にとっても重要な著作であると考えるわけです。先生のこの本の出版を契機にしてかなり社会学におけるこの面の論議が広がってき、私ども若い世代もそれにつれて、自由な論議を展開してきたということが云えると思います。

第四の時期というのは、これからということになるわけですが、そのはじめが、つい最近出ました『アジア的生産様式の問題』（一九六六年、編訳、岩波書店）であると思います。先生はこれから三部作にわたる仕事を考えておられます。日本を含むアジア、東洋と西洋のいわば比較文化史的なしかも比較社会史的なものを考えておられます。その端緒をこういう形で、あるいは雑誌「思想」に二つの論文としてすでに発表されています。おそらくその仕事をこれからお続けになっていかれると考えます。

こういう業績を示され、他にも、ここではふれませんでしたが多くの仕事をされているわけです。たとえば、全くといってよいほどふれませんでしたが、「近代フランス社会思想の成立」や「社会思想史あるいは思想の社会史」などの社会思想の研究があります。それらを含めて、きわめてひろい範囲で先生の研究はすすめられています。それらを通して、先生について私はここで二つの点だけを注意しておきたいと思います。

一つは、先生が文学についてまた心理学についておやりにな

り、あるいはいろいろなことをおやりになりましたが、先生がおやりになったことは実は非常に狭いことではなかったのか、あるいはただ一つのことではなかったのかということです。先ほどの先生の言葉を借りますれば、史的唯物論にとって弱みになっているところ、社会意識とか、あるいは社会心理とか、イデオロギーとかいったいわば上部構造そのものの問題、土台とイデオロギーの間と云ってもよいような関係を終始追求されてきたと云えるのではないか。それをいろいろな形で追求されてきたのではないかと私は考えるわけです。このことは、先ほど、私は文学ということで申しましたが、これから本田先生がアジア的生産様式とか、比較文化論ということをお始めになるのが何か奇妙な感じがするように一般的にはとられるかもしれません。しかし私はそうではなくて、実は本田先生の中ではそれは常に一貫した問題として出されてきたものだと考えます。また、そう捉えなければいけないように思うのです。すなわち、その問題について、一般的、原理的なレベルで研究され、フランスの研究をとおしてそれをふかめ、そしていよいよ日本の問題をふまえてさらに追求するといった、きわめて息のながい仕事の仕方であると思うのです。

もう一つの注目しなければならない点は、その発端において何を問題としていたかが大切だとは、よく云われることですが、それも終始追求された問題、先生が『心理学概論』でお始めになったことは社会心理学であったと同時に、今日問題になっている行動科学の問題ではなかったかと思います。現在、新しいと云われている問題を非常に早くにすでに問題にされていたわけです。またその問題は、先生の講義の中にも出てまいりましたように、当時プレハノフが問題にし、あるいはブハーリンが問題にしたものであります。そして、今、プレハノフやブハーリンがあらためて問題になりつつあり、アメリカでもヨーロッパでも、また長く彼らについてふれなかったソヴィエト、東欧でも取り上げられています。かって、約三十年前に問題にされていた、一見遠いところにあった問題が、今新しくよみがえってきているという事実を、私達は冷静にみる必要があると思います。このことは日本の社会学を研究史的にあとづける上でも大切なことなのです。非常に不幸なことでありますが、日本の社会学史の中で、本田先生はいわばのけ者であります。本田先生は社会学者というよりも社会思想史の研究家として社会学からは排除されています。しかし、私は先にものべましたようにそうではないと思います。実は、本田先生はすぐれて社会学者であったのだと私は思います。本田先生が辿られたようなあり方をのけ者にしてきた日本の社会学史、それだけではなくこれまで一般的に共通している日本の社会学史、先生の表現をややもじっていえば、社会学の思想の歴史についての検討が、それの書き改めが必要だと私は考えています。

おわりに本田先生の研究の態度と申しますか、姿勢についてふれておきたいと思います。本田先生はアカデミックな仕事の中で絶えることなく自分の問題を追求されたわけですが、先生の仕事の仕方というのは決してセクトをくまないところにあります。社会学というような狭い内にとらわれない、あらゆる分野の人、あらゆる方法の人から学び、かつそれと闘い、協力を続けておられます。これは先生の知友のひろさによってもしめされているとおりです。先ほどのお話も大塚さんに対するポレミークというより、ウェーバーに対する基本的な根源的なポレミークであったと思います。そういう闘いを通し自らの問題、当面解決をせまられている問題の解明のためにセクトでなく、領域、分野を広げ、協力をすすめてこられたのです。もしセクト主義というのがあるなら、セクトというのは自らが弱いからセクトを組むのであって、強いものは、自らに自信のあるものは、セクトを組む必要がありません。自らの研究をなげだし、人々の批判と援助をえて、さらに自らをつよめていく自信のあるもの——正に科学者研究者としての基本的態度をもつものは、決してセクト主義におちいるはずがありません。そのように先生は自らを狭く限ることのない勇気をお持ちです。どんな苦難の時にも自らの問題、為すべき問題をしっかりとふまえて研究をされてきたのだと思います。私は、研究者にとって必要なのは、まさにその問題を追求する、根源的に追求する、たゆみなく追求する姿勢なのではないかと思うのです。このことと関連して、私は先生のみづみづしさ、若さについてふれておきたいと思います。私はよく他の大学の方から、「本田先生は若いね」と最近いわれつづけてきました。一つには繁忙な名古屋大学の要職を離れられたことにもよるでしょう。しかしそれよりも私は、つねに新しい発展をつづけているその生活全体が、先生を若くさせているのだと思います。若さとはいうまでもなく物理的、生理的なことではありません。七十才にして、大問題であるアジア的生産様式の解明に手をつけ、これから三部作を書こうとされる、その研究者としての本田先生の若さをいっているのです。真に学ぶものの若さのあり方を私たちは先生から教えられていると思うのです。

私どもは本田先生から、そういう学問に対する姿勢を学びとってまいりましたし、そして、それが新しい真の社会学の構想を、生み出させていく基盤として、法政大学の中にいまたしかに作り出されてきたと確信します。そのために本田先生は非常に大きな役割を果して下さったのです。

本田先生は法政大学を去られ、和光大学へ移られるわけですが、残りました私どもは先生の残されたそうしたもののすべてを大事にしたいと思います。そして今、国際的にも社会学というものが史的唯物論と社会学といった形で、あるいはマルク主義社会学と史的唯物論という形で、いろいろと論議されていま

す。すでに先生は国際的な論争も行なわれているわけですが、私どもも又それに参加していかなければなりません。またいくつもの解明すべき問題が私たちの前にあります。それらを解明するために、多くの人たち、さまざまな人たちと本当に共同研究をおしすすめることのできる場に、私たちはここをしたいと思います。そして輝かしい成果を、新しい真の社会学をここでつくりあげうるように努力したいと思います。そういう私どもの気持をお伝えして、長い間お導きいただきました本田先生へかさねてお礼を申し上げて話を終りたいと思います。